

8月3日から6日の4日間、『いいたて希望の里学園』の9年生が、上智大学の学生ボランティアの皆さんとオンラインで交流し、学習支援を受けました。上智大学の学生ボランティアが村を訪れて行う夏休みの交流・支援は、平成26年から6年間続いていました。昨年は新型コロナの影響で実現できませんでしたが、今年は初めてオンラインでの交流に挑戦しました。今後も月に1回程度の学習支援を継続していただきます。

いいたて希望の里学園
後期課程 9年生
×
上智大学

8/3

学内や学生生活の様子を見せてもらいました

楽しみながら交流ができました

学生と生徒が経験や夢を語る対話の時間

交流を重ねた4日間が終了。画面で記念撮影

8/6

最終日は留学生も加わり英語での交流に挑戦

英語でコミュニケーションができてとてもよかった！

4校の歴史を伝えます

『いいたて希望の里学園』の校舎2階に、閉校した4校『草野小学校』『飯樋小学校』『白石小学校』『飯館中学校』の校旗や貴重な資料が展示されています。

令和2年度に4校を統合する形で誕生した『いいたて希望の里学園』のルーツや、故郷の歩みを知る上で、大きな意義を持つ展示となっています。現在は新型コロナの影響で校舎内への立ち入りが制限されていますが、来校の機会が訪れた際には、ぜひご覧ください。



4校から引き継ぐ数々の資料を展示しています

集火式

左から、いいたてまでいな再エネ発電株式会社の中川喜昭さん（宮内）、いいたて希望の里学園の山田徹校長先生、やすらぎ工房の二瓶貴大さん（草野）

希望の火

『いいたて希望の里学園』の全校生が共同制作した『希望の火』。児童生徒と教職員がラオスに向けた熱い応援メッセージを寄せ書きしました。

再生の火

大火山にある『いいたてまでいな再エネ発電所』の太陽光パネルで発電した電気を着火装置につないで採火した『再生の火』。

復興の火

細い鉄の先端が熱を帯びるまで手槌でたたき、その熱から付け木に火を灯した『復興の火』。種火を一切使わない鍛冶職人ならではの巧みな技術です。

東京2020パラリンピックへ 飯館村の種火に想いを寄せて

8月11日、交流センター「ふれ愛館」にて、『東京2020パラリンピック聖火フェスティバル「飯館村の種火」集火式』が行われました。共生社会への理解を深めるため、各市町村において、地元産業や伝統行事を生かした独自の手法で種火を起こします。

飯館村では、『希望の火』『再生の火』『復興の火』の3つの種火を、「飯館村の火」として集火。その後浜通りの火、福島県の火と合流して開催都市の東京へと届けられました。



3つの種火を灯したキャンドルは、地域おこし協力隊の大槻美友さん（草野）が今回のために制作したものです。高さは約50cm、いいたてブルーを取り入れた素敵なキャンドルです。